

会員の広場

シーボルト家の子孫と宇和島藩

宇和島市医師会 萩山正治

慶応2年(1866年)8月4日の暑い午後、イギリスが誇る日本派遣艦隊の旗艦プリンセスロイヤル号がゆっくりと親善訪問の為宇和島湾深く入り、榑崎沖に錨をおろした。この船に日本語通訳官として20歳のアレキサンダー・フォン・シーボルト青年が乗船していた。彼の父親はかの有名なシーボルト博士でシーボルト事件で日本を永久追放されたあと、帰国して本妻との間に長男として

生まれた。

日本も開国し、オランダと通商条約も結ばれたので、シーボルト博士の30年ぶりの再来日が許され、父とともに13歳で来日していた。この時、宇和島藩の英語通訳は三瀬周三であったが、彼は3カ月前に、シーボルト博士と日本女性との間に生まれた楠本イネの娘タカ子と結婚したばかりであった(図1)。彼はシーボルト再来日のときの唯一、最後の弟子で、子息アレキサンダーの日本語教師でもあった。旧知の二人はこの宇和島でガッチリと握手をしたにちがいない。イギリス側は日本語の達者な通訳がいるので、英語通訳は必要ないと申し入れてくる程、アレキサンダーの日本語は上達していた。16歳でイギリス公使館通訳として採用され、生麦事件勃発とともに幕府との交渉に活躍し、17歳のときには薩英戦争がおこりイギリス軍艦にのりこみ、通訳として働いた。その後外交官としての道をあゆんだ。

宇和島伊達家史料にアレキサンダーの手紙(図2)が保存されている。39歳のときの手紙であるが、旧知の伊達宗城にあてた手紙で、父シーボルトの著書「日本」の原版もなくなり再版したいので、公よりの援助を願う甘えの手紙を書いている。

ヘンリーシーボルトはシーボルト博士の次男で18歳のときに来日し、オーストリア・ハンガリー公国の代理公使になった。(図3)



図1 三瀬周三・たか子の写真
(大洲博物館蔵)

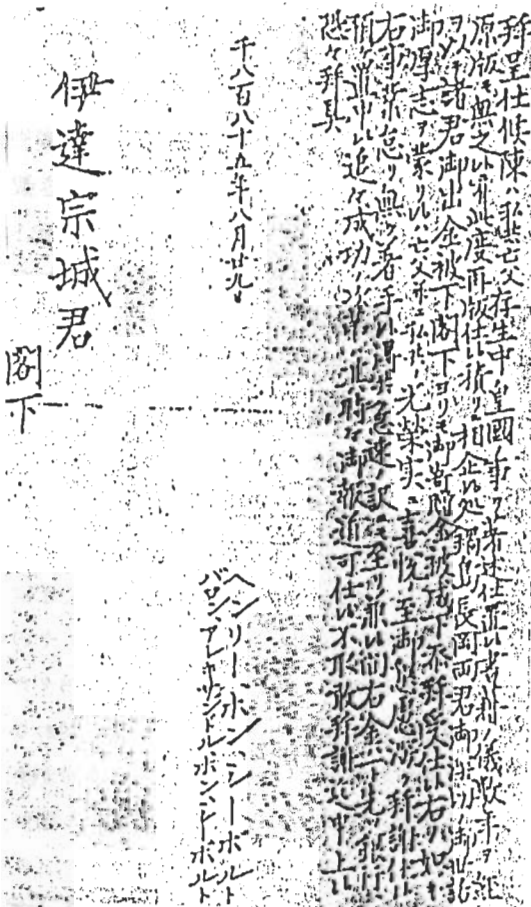


図2 シーボルトの息子達より伊達宗城に
あてた手紙 (伊達家所蔵)

この手紙は代筆とも思われるが、語学の秀才三瀬周三がマンツーマンで日本語を教授したことを考えると自筆の可能性もあると推測したくなる。いずれにしても価値の高い史料であると酒井シズ順天堂大学医史学教授は認めている。

最近テレビで全く日本人の日本語と区別のつかない日本語を話す外国人が多いが、文字も訓練すれば、日本人と同じように書けるのではないかと思う。

何故シーボルト著「日本」の再版本上下2冊が伊達家に保存されているのかその理由を著者はこ

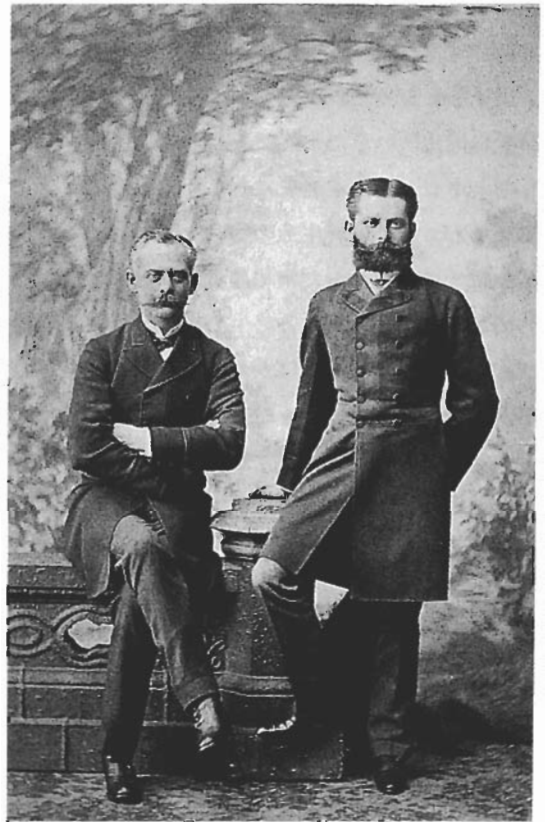


図3 (左)アレキサンダー・シーボルト
(右)ヘンリー・シーボルト

の手紙を伊達家史料の中からみつけて報告した。

シーボルトの日本人妻お滝との娘、楠本イネの生涯は、宇和島藩出身の二宮敬作に負うところが多かった。シーボルトの開いた長崎の鳴滝塾の第一の秀才は高野長英だが、シーボルトが最も信頼を寄せていたのは二宮敬作と高良斉であった。シーボルトがオランダ公使一行に加わって江戸に参府旅行を行った時、この2名を随行した。この途中富士山測量をシーボルトに命じられた敬作は、目付の監視の目をのがれて、行列をぬけてで実際に富士に登って気圧計で測量した。当初は6分儀位で簡単に測量したものと考えられていた。日本人の報告では4982mであったが、3794.5mと

実際より18.5mだけ高い正確さであった。このため敬作はシーボルト事件に連坐した門人23人中最も重い罪となった。シーボルトは敬作を救うため幕府に帰化願いをだす程であった。

シーボルトは日本退去にあたりイネの養育を依頼するが、敬作は終生その約束を守った。清水英先生はその編集をした宇和島藩医学史の中で、敬作の師事した人に対する終生の思愛は儒教の道德感が基本になっているばかりでなく「人を愛する誠」が身近な人々の心を打たせると述べている。

出牢のあと敬作は伊達宗紀の内命で卯之町で開業し、とくにシーボルト医学の外科を継承して医学に励んだ。

敬作はイネを14歳から19歳まで卯之町で養育し、イネが後日産科医として身をたてる基礎を築き、安政元年には再度宇和島に呼び寄せて村田蔵六(大村益次郎)について蘭学の基礎を学ばせた。その後も準藩医扱いをうけてたびたび宇和島を訪れていたらしい。小説ではイネが紅毛碧眼の美女で蔵六とのロマンスがあったように描かれているが、宇和島を訪れたこともあるアーネストサトウによれば、顔立ちの美しい女性だが、ヨーロッパ人の面影は殆どみられなかったという。イネが岡山の石井宗研のもとで医学を研修中、宗研との間に生まれた娘がタカ子であった。伊達宗城夫人に宇和島御殿で育てられ、三瀬周三と結婚してからは城下の神田川原付近に住んでいた。

敬作は藩命により安政3年(1856年)長崎に住むことになったが、まだ幕府の長崎払の刑は解かれておらず、変名の下に特別のおぼしめしをもっておこなわれた。武器の調達、情報収集、3年後に再来日するシーボルト博士を迎える準備、その他密貿易の関与が考えられる。

安政6年(1860年)夢にも忘れたことのないシー

ボルト先生が、オランダ商事会社評議員の肩書で再来日した。立派に養育したイネと、父シーボルトを30年目に面会させる劇的機会を作り出したのは敬作の努力と執念によるものであった。三瀬周三(実名は諸淵)は大洲生まれだが15歳のとき叔父敬作の養子となり、蘭学医学の弟子となった。21歳で再来日したシーボルトの最後の弟子となり、日蘭英仏対訳辞典作成に協力しているから、周三の語学力は抜群であつたらしい。

周三が23歳のときシーボルトが幕府顧問として招かれたとき、江戸に行き通訳として活躍したが、半年後シーボルトは解雇され、周三は幕府通詞をさしおいて通訳したねたみや幕府の機密を漏らした疑いで佃島の獄に3年半投ぜられた。伊達宗城は大洲藩主と協力し、周三の救出に尽力し、その後宇和島藩に招かれ、藩主の意向でイネの娘タカ子と結婚した。ここで、シーボルトと深い関わりをもった敬作と周三が、共に投獄される運命が不思議であるが、刑余者を宇和島藩がひきとり面倒をみるということは、反幕、反体制的立場をとり幕府とは明確に一線を画していたといえよう。宇和島藩は薩摩と違って討幕の意志は持っていなかったが、雄藩大名連合による幕府機構の改革には限界を感じていた。来るべき変動に対処する為、富国強兵策をすすめ、兵器の輸入や、海外貿易にも目をむけねばならない事情があった。

その為、蘭学者二宮敬作、高野長英、大村益次郎、三瀬周三などを通して西洋の知識を導入し、結果としてシーボルト家の人々を宇和島に結び付けることになった。

長崎出島を通して行われる貿易の中で、武器について洋書の輸入が最も多かったといわれるが、伊達宗城のように小さな窓を通して西欧の事情をかなり広くみていた人物がいたのである。西郷隆

盛が宇和島にやってきて天赦園で宗城に四賢侯会議を開いて日本の進路を決めて頂きたいと説く程、聡明な君主であった。

英国パークス公使一行に対する宇和島側の歓迎ぶりをみると、上陸した公使一行を城下の南御殿に迎えて歓迎の宴席がもうけられた。ここでパークスを驚かせる事件が起こった。伊達宗城、宗徳藩主父子は自分たちの家族を士官の居並ぶ宴席で紹介し、さまざまな会話を楽しみ宗城がウォーターローの戦いのことなど詳しく知っているのにはイギリス側士官達をうならせてしまった。

庶民の歓迎ぶりも大変なもので、上陸したイギリス兵に「あんたらどこからきなはったかなー」「お茶でものみにきなはいや」といったかどうか、夕方船に帰るイギリス人達を提灯行列で見送り、ミカンや菓子等を差し出した。又、市民に旗艦プリンセスロイヤル号が一般公開されると一般市民に加えて婦人達まで大勢が押しかけてくるなど前代未聞のことであった。とくに半年後に福岡と長州で同じように艦内を開放したところ、福岡では数人、長州では数名の藩士しか来艦しなかったとの事。この報告をうけたロンドンのクラレンドル外相もウワジマ市民のコスモポリタンぶりには驚い

て「ひょっとすると、日本の将来は明るいかも知れない」と微笑を禁じえなかった。

パークス一行は別れに際して、ユニオンジャックをお礼に宇和島藩に渡した。120年後の昭和60年、宇和島駅前の錦会館で現在の伊達家当主宗礼氏と英国ヒッチ公使はこの残された当時の蒸気船のすすのついたユニオンジャックの前で握手をし、歴史の再確認をした。(図4)

平成8年7月、シーボルト家の200年展が長崎に続いて宇和町先哲記念館で開催された。シーボルトは日本の近代医学に計り知れない影響を与えた医師であり、又博学者として科学的視点と手法を用いて日本研究をおこなった。なぜシーボルトがあのような広範な調査や研究を日本で行うことができたのか、シーボルトの来日する以前の育った境遇や教育などに焦点をしばって詳しい展示がされ興味深かった。しかし、シーボルトの目的はオランダ政府が課した国家利益を優先させる学術調査目的が先行していた。

シーボルト事件で発覚した日本地図はすでにコピーが流出しており、帰国後シーボルトは地図をロシアに売り込んだり、ペリーに日本へ向かう軍艦に乗船させてくれるよう手紙を出している。西

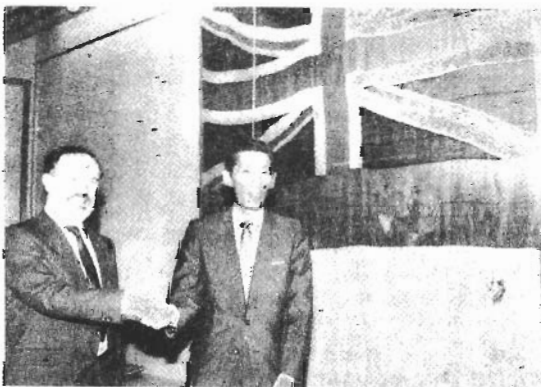


図4 左 英国ヒッチ公使
右 伊達家第12代当主 伊達宗礼氏



図5 ブランデンシュタイン=ツェッペリン家
家族写真

洋の世界からみれば立派なスパイであった。シーボルト博士のドイツにおける子孫コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏（図5）も会場を訪れたが、あの飛行船のツェッペリンの血筋もひく貴族であるが、遠い東洋の地に先祖がのこした子孫ゆかりの地で歓迎される気持ちは複雑なものではなかったろうか。

江戸300諸侯の大家の中在所蔵品が今日伝えられているのは宇和島伊達家を含めてわずか数指といわれている。明治以後の時代の変遷にもかかわらず、所蔵品を散逸することなく美事に保存できたのは堅実な財政を固持したことにある。その陰に渋沢栄一や宇和島出身の関西実業界の巨頭土居通夫の力があつた為といわれる。貴重な数万点に及ぶ古文書や記録をマイクロフィルム化して一般公開するだけでも市の活性化に結び付くと思うのだが、ふるさと創生資金はすでに2カ所の温泉掘削に使ってしまった。

幕末維新の風雲の中を天下の四賢侯伊達宗城が日本史の檣舞台に登場し高野長英や大村益次郎、オランダおイネが市内を闊歩し、明治に入れば宇和島出身の天津事件の立役者、児島惟謙や民法の父穂積陳重、鉄道唱歌の大和田建樹、小説の末広鉄腸が大活躍をする宇和島の歴史は多彩で面白い。

それにしても幕末の宇和島のコスモポリタンはいったいどこへ消えてしまったのだろうか。

参考資料

1) 宇和島藩医学史

宇和島市医師会医学史編集委員会

代表 清水 英

2) 生麦事件

吉村 昭 著

3) うわじま物語

谷 有二 著

4) シーボルト家の二百年展

シーボルト記念館編集

